

阿刀田高さん

1935年新潟県長岡市にて生まれる。その後すぐに東京・西荻へ。都立西高、早稲田大学仏文科を卒業後、国立国会図書館職員となる。勤務のかたわらコラム、幻想小説、ミステリーを執筆。1972年国立国会図書館を退職。1979年「来訪者」で日本推理作家協会賞、「ナポレオン狂」で直木賞、1995年「新トロイア物語」で吉川英治文学賞受賞。これまでに180点以上のショートショート、短編、長編小説、エッセイ、古典書評、ノンフィクションなど幅広いジャンルの作品を発表している。

子ども時代、そして苦難の始まりの学生時代

父親が新潟県の長岡で鉄工所の工場を営んでいて、仕事で東京と長岡を行き来していたんです。「子どもたちは東京で勉強させる」というユニークな思想の持ち主で。そんな事情で長岡と西荻窪に家があり、私は10歳まで西荻窪で過ごしました。今思うと恵まれた子ども時代だったと思いますね。

でも戦争が激しくなってきたことで長岡の方に疎開。終戦後もしばらく長岡にいたのですが1950年、中学卒業とともに帰京し、都立西高校に入学しました。

西高時代は渋谷の初台に下宿。西荻の自宅は工場経営の資金繰りのために、父親が売り払ってしまったんです。やはり戦後の経営が苦しかったのでしょうか。そして17歳の時に父親が55歳で急逝。当然のことながら、父親の死は私の人生の中で大きな出来事でした。というのは「男の子は理系の勉強をしてエンジニアになるべき」と常々言われており、当然それに従い東京工業大学を受験。しかし落ちてしまったのです。それで急に進路変更して早稲田の仏文科に入学。父親が生きていたら「文系は駄目だ」なんていわれたでしょうね。

今思うと父親の死がきっかけで、私の苦難時代が始まったような気がします。急に貧乏になり、加えて肺結核を患って2年間の療養生活を送りました。

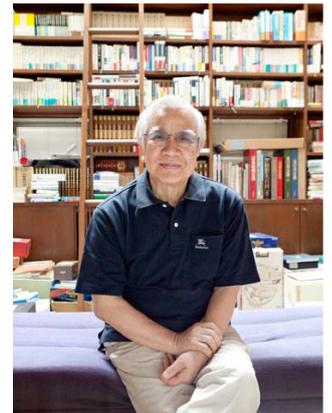
貧しい日々が導いた「執筆」の仕事

学生時代の後半頃は家賃から生活費まで、家庭教師やアルバイトなどをしながら工面していました。

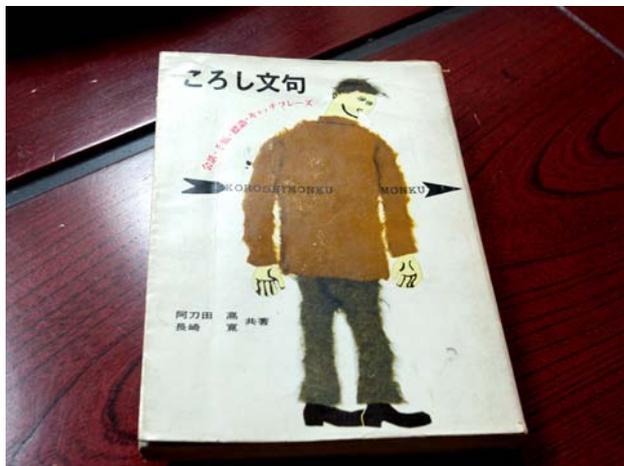
当然、就職するなら月給が高いところがいいなと。ところが就職難に加えて、結核で2年遅れて卒業していることもあり、なかなか就職が決まらなくて。そんな時に文部省図書館職員教習所（現：図書館情報大学）という職

業養成校があることを知りまして。そこに1年間通って国立国会図書館に就職しました。それで経済的には安心のはずだったのですが、当時は月給が安くてね。もちろんそれまでよりははずいぶんよくなりましたが、すべてを給料

で賄っていくのは、やはり大変なことでした。それでまたアルバイトを考えましてね（笑）。外国人のための小さな日本語学校で、日本語教師の仕事を時々やるようになりました。いわゆる小遣い稼ぎです。そんな中、恩師から「雑誌を作るから編集を手伝ってくれ」と声をかけられ、編集の手伝いをはじめたんです。ところが原稿がなかなか集まらないんですよ。困ったなあ。仕方がないので私も執筆する羽目になって。それが新聞の目にとまり、私の書いたページが紹介されたんです。「ころし文句」という惹き文句についての記事で、今でいうキャッチングコピーですね。その記事を見たある出版社の人から「面白いので本を書かないか」という話があり（※1）「ころし文句」というタイトルの本を出すことになりました。1964年のことです。これは大変ラッキーなことでした。思い起こすと「お小遣い稼ぎに」と思って書き始めたのが私の出発点。文学修行をしたいから書いた、なんてことではないんですよ。それから何年かは執筆をしつつ、図書館の勤めも続けていました。この頃は注文を頂いたらなんでも書きましたが、常に心がけていたのは物を書く時は「お金をいただく」ということ。必ず一定の読者に対して満足を与えるものでなけ



れば書くかいないと思っていましたから。そうこう雑文を書いているうち、月給より小遣い稼ぎの方が多くなって。それで国立国会図書館を退職することになりました。1972年のことでした。



作家としての日々

子どものころからストーリーに対する思い入れは強かった気がします。落語全集が好きでしたね。

昔は子どもの本なんてありませんから、親父の本棚からおもしろそうなものを見つけ読むしかないわけです。落語の次は銭形平次（※2）、それに加えて芥川龍之介。この3つには影響を受けていると思います。

落語といえば、私の作品は必ずオチがあるんです。それに加えてミステリーは銭形平次の影響なのかもしれません。「恐怖」「幻想」というのは私のテーマのひとつなのですが、日常にある恐怖が一番恐怖だと。怖い場所について怖い思いをするのは当然。最初から行かなければいい。でも普段どおりの生活をしている人間が怖い目にあう。これが一番恐怖だと思います。

芥川は都会的な短編という意味で影響を受けました。といっても芥川作品と似てるなんていったら、文句言われそうですが（笑）

杉並の今の家には1984年に引っ越してきました。杉並は自分にとって際だって密接な関係のある場所ですね。西高時代の友達もいますし、今でも同窓会は西荻窪のあの店、という感じですから。昔は西荻窪なんて麦畑が広がっていたんですよ。私の作品にも具体的な杉並区の地名が出てくるのがありますね。やはり住んでいることと関係あります。子どもの頃は神田川が大好きでね。今でも神田川には強い思い入れがあります。

これまで短編小説を数多く執筆してきましたので、これからも私なりの短編小説を書いていきたいと思っています。もうひとつは世界各国の古典を読み解いた「知っていますかシリーズ」というものがあるのですが、今度「日本の古典をやさしくひもといて語る」という内容の本の執筆に取りかかっているところです。来年あたりにはこの本の中で、日本の古典はこんなに楽しいんだよ、ということを紹介していきたいと思っています。

※1 発行は池田書店。現在は絶版になっている。

※2 野村胡堂（ルビ：のむら ことう）による小説。正式には『銭形平次捕物控』（ルビ：ぜにがたへいじとりものひかえ）という。



取材を終えて

子ども時代、苦難時代の話、杉並に対する思い。阿刀田さんの語りは大変魅力的でつい引き込まれてしまう。最後の一行まで考えてから執筆をはじめられるという阿刀田さんは「執筆は将棋指しに通じる」というわかりやすい比喻を使って説明してくださった。また彼の作品には必ずオチがある。そうか落語物語と通じていたのか、と阿刀田さんの話を聞いて納得した。さて今度はどんな作品を読者に提供してくれるのだろうか。ますます楽しみだ。

—取材・執筆：高橋貴子、撮影：嘉屋本暁（取材・2011年8月23日
掲載・2011年9月29日）—